

## 欧米における日本の画史・画論の受容について (一)

— W. アンダーソン著 “*The Pictorial Arts of Japan*” を中心に —

石川 千佳子

### The Acceptance of Traditional Japanese Art Theories in Europe and America (1)

— A Study of W. Anderson, *The Pictorial Arts of Japan* —

ISHIKAWA Chikako

#### 序

近ごろ、欧米における日本美術の受容や、日本美術史の形成過程に関連した研究が盛んである。いわゆるジャポニズムの流行が物語るように、欧米において、日本の美術品が本格的に紹介されるのは19世紀も後半になってからであり、またその時期は様式史を中心とした近代美術史学の確立期とも重なっている。さらにいえば、近代美術史学の枠組みにもとづいて、日本美術史に関する著作が、19世紀末から20世紀初頭に国内外で編まれることになる。つまり、美術の本質を形象性に見て、形式が展開していく法則性を追究する様式史を仲立ちに、単なる異国趣味の域を超えた欧米における日本美術史と、ナショナリズムの高揚に伴ってわが国で編まれた日本美術史が、相互に影響し合いながら成立していったと考えられないだろうか。

本稿は、あえて視覚的な作品ではなく、画史・画論すなわち理論に注目し、欧米におけるそれらの収集および受容の状況を明らかにしていくことによって、欧米における日本美術史観の底流にある芸術思想を浮彫りにしようとするものである。

その事始めとして、2008年の英国調査の結果を報告するとともに、19世紀後半に成立した日本美術の通史であるW. アンダーソン著 “*The Pictorial Arts of Japan*”<sup>1)</sup>を、同書に設けられた絵画批評の章に焦点を合わせて読み解く。

#### 1. アストン和書のなかの画史・画論

ケンブリッジ大学図書館には、W. アンダーソン (以下アンダーソンと表記) と関わりの深いアーネスト・サトウの蔵書を引き継いだアストン和書が収蔵されている。この膨大な和書コレクションについて、帛尾達哉氏による『アストン和書目録』<sup>2)</sup>およびP. コーニッキー・林望による『ケンブリッジ大学図書館所蔵和漢古書総合目録』<sup>3)</sup>を手がかりに検索し、現地調査で確認できた画史・画論等は以下の9冊である。

- 『墨竹発蒙』菅云鳳 1857年 4冊
- 『八種画譜』1710年 現存7冊(1冊紛失)
- 『画図展覧会列品目録』狩野守節 1880年
- 『増補 浮世絵類考』大田南畝著・斎藤月岑編 発行年不明 3冊+別冊2写本)
- 『狩野五家譜』小林自閑齋 1812年(写本)
- 『本朝画史』狩野永納 1693 5冊+別冊1
- 『万宝全書』1696年 13冊
- 『皇朝名画拾彙』檜山担齋 江戸(年代不明) 5冊
- 『画乗要略』白井華陽 1831年 現存3冊(巻3~5)

\* 目録番号順に並べ、発行年は比較しやすいように西暦で記述している。

これらの文献の内容から、特に注目された点について示しておく。まず、『墨竹発蒙』は墨竹を描くための入門書だが、流派の別にとらわれず写生を重視する旨の記述がみえる。次に、展覧会目録であって画論とはいえないが、日本美術史の構造を考えるうえで興味深いのは『画図展覧会列品目録』である。同書によると、展示は第一部「探幽遺跡」、第二部「本朝古画」、第三部「宋元明画」、第四部「古画模本」で構成されており、日本の絵画では探幽を中心とした狩野派と土佐派、および雪舟の作品が飾られていたようだ。続く『増補浮世絵類考』は、写楽に関する記述がみえることで有名な浮世絵師の画人伝である。

また『万宝全書』は、横長の手帖のような小型本だが、13冊あって、絵画・彫刻・工芸を網羅した日本美術百科事典というべき便利な書物である。そのうち1~3冊が「本朝画人伝」に充てられ、名前が列挙されている画人は、上巻が聖徳太子から周文までの133名、中巻が雪舟から酔墨斎桃林までの171名、下巻は狩野正信から李欽の136名の総計440名にのぼる。加えて第4冊は「唐絵画人伝」であり、ここには戴崇から郭城鄭沢までの178名が記載されているが、101番目の張思恭以下は文章による記述がなく、印章のみがみえる。さらに、『皇朝名画拾彙』は本朝画史を補う目的で書かれた画人伝である。

なお、欠巻があったのは『画乗要略』で、三巻から五巻が保存されている。それらの内容は、巻三が僧心越から有川梅隠に至る主に南画派、巻四が圓山応挙から五十嵐華亭の主に写生派、巻五が岸同功~上田華堂の主に岸駒派の画人伝であった。

## 2. *The Pictorial Arts of Japan*に登場する画史・画論について

初めに述べたように、アンダーソンは*The Pictorial Arts of Japan*において、第4編第9章<sup>4)</sup>に批評の一章を立てて日本の画史・画論の紹介を行うとともに、それらの内容に批評的な検討を加えている。

まず、同書内で英訳による直接の引用、もしくは内容への言及がみられた日本の画史・画論を、同章に限らず全体から拾い上げて以下に並べることにする。その際、引用や内容への言及が特定できた原書の頁数と、それらの内容についての簡単な覚え書を付しておく。

『本朝画史』狩野永納 1693 p.44およびp.49

...前者は如拙について、後者は雪舟についての記述が引用されている。

『画乗要略』白井華陽 1831 p.87

…円山応挙が古画の模写から始め、写生によって新局面を開いた旨の記述が引用されている。

『絵本大和比事』西川祐信 18世紀半ば(宝暦明和前後) p.201

…絵画における陰影の重要性に関する記述が引用されている。

『西遊伝』司馬江漢 1794 p.208

…本格的に透視図法を学んだ江漢が、その紹介を行った著書として言及されている。

『画則』櫻井雪館 1740 p.186およびp.241

…前者では、円山四条派を意識した写生画についての説明と、それに対する否定的な評価が引用されている。後者については、書名がみえるものの直接的な引用文を特定できない。

『画筌』林守篤 pp.241-242

…絵画批評について論じた第4編9章前半にみられる7つの引用文のうち、先の3つが同画論に拠る。絵画制作の心構え、写生(形似)に関する批評、古典研究の重要性についての記述が引用されている。

『画巧潜覧』大岡春卜 pp.188-199およびpp.221-243

…前者の引用頁の範囲内では、十種の筆法の解説および注釈と図版が引用されている。後者の絵画批評について論じた第4編9章では、同所の前半にみられる7つの引用文のうち、後の4つが同画論に拠る。画の品評や鑑定に関する心構えと、方法についての記述が引用されている。

『絵のこと』(玉勝間巻14『つらつら椿』)本居宣長 pp.244-247

…絵画批評について論じた第4編9章の後半部分に、B.H.チェンバレンによる同画論の英訳(Transaction of Asiatic Society of Japan, vol.12)が、後半を一部省略するものの、ほぼ全文にわたって引用されている。引用された内容の中心は写生(形似)の問題である。

次に、直接の引用や内容への言及部分は特定できなかったが、本文中に数多く記載された墨刷りの絵本類の中から、画論としての意味も含むと思われたものを以下に例示する。

『宋紫石画譜』宋紫石 1762~1771

『金工便覧』

『金工鑑定秘訣』北島長四郎

『金工鐸寄』

『装剣奇賞』

- 『画史会要』大岡春卜 1701
- 『和漢名画苑』大岡春卜 1749
- 『和漢名筆画詠』大岡春卜 1750
- 『和漢秀画苑』大岡春卜 1760
- 『和漢名筆金玉画譜』大岡春卜 1764
- 『和漢名画法』大岡春卜 1767
- 『画本故事談』橘守国 1714
- 『絵本写宝袋』橘守国 1720
- 『運筆麿画』橘守国 1804
- 『絵本通宝誌』橘守国 1725
- 『名山図譜』谷文晁 1810年頃
- 『墨竹発蒙』乾々斎雲風(菅云鳳) 1831年
- 『絵本高鏡』河鍋曉斎 1870年頃
- 『画典通考』大岡晋斎・橘守国(画) 1727
- 『謡曲画誌』毛利田庄太郎 1732
- 『絵本鶯宿梅』 1740
- 『画本直指宝』 1745

等々

\* 網かけはケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書」に含まれる画史・画論と重複するもの

### 3. アンダーソンの批評的視座

欧米に日本美術が本格的に紹介され始めたとはいえ、浮世絵と工芸品に大方の興味が集中していた時代に、アンダーソンは、本書の題名が示すとおり、日本の絵画を流派に偏ることなく収集したことで知られる。しかし、この題名をもっと詳細にみると、日本の絵画は‘pictorial arts’と称されているのであって‘picture’ではない。いわゆる 純粹芸術‘fine art’とは見なされていないということだ。

日本の絵画が‘arts’すなわち一応は美術とされても、収集品は完結した芸術作品である以上に、日本美術を体系的に捉えるためのサンプル(標本)として扱われる。そうした収集姿勢の背後に、ヨーロッパの啓蒙思想にもとづく博物学的な意識が存在するという点に関しては、彼のコレクションの実証的な研究を進めている下原美保氏や彬子女王によって、既に指摘されているところである。<sup>5)</sup> 彼にとって正統な絵画とは、本書において日本の絵画の特徴を論じた箇所の一文<sup>6)</sup>に顕著であるように、キアロスクーロ(明暗法)と透視図法と解剖学を踏まえた、いわばアカデミックな様式を持つものことである。同時代のヨーロッパの美術が、ロマン主義からリアリズムを経て印象派へとめまぐるしく変貌をとげる一方で、古典的なアカデミズムが崩壊していく状況にあったことを考えれば、いささか旧弊な絵画観にも思われる。しかし、そこには単に先駆的な批評家を除く、当時の一般的な芸術思潮が反映されているというのではなく、アンダーソンの外科医すなわち近代科学者としての、客観的な自然観察とその再現を重んじる傾向が含まれているようだ。

本書に引用された画史・画論の内容をみても、彼の関心の在りようは明らかである。批評の

章の前半には、先述の覚え書のように7つのまとまった引用文があり、前の3つは『画筌』から絵画制作に関わる記述<sup>7)</sup>が、続く後の4つは『画巧潜覧』から絵画鑑賞に関わる記述<sup>8)</sup>が採られている。この画筌からの引用文がまさにそうなのだが、本書の全体を見渡しても、たとえば『絵本大和比事』<sup>9)</sup>のように重要視するにせよ、『画則』<sup>10)</sup>のように厳しく批判するにせよ、総じて写生および形似、すなわち対象の視覚的再現に関わる引用が目立っている。

さらに、いくら短い随想とはいえ、同章において全文に近い英訳が引用されているのが『絵のこと』である。目次にわざわざ“Motoōri’s remarks”と記しているところからも、<sup>11)</sup> アンダーソンによるこの画論への共感が窺われる。

享受者が書き手であったヨーロッパの芸術論に対して、日本の画史・画論の場合には大方の著者が制作者であり、その意味で、絵師ではない本居宣長による同画論は例外的といえよう。宣長自身も文中で「おのれ、絵のことはさらにしらねば、とかくいふべきにあらざるに似たれども、よろずのことおのがよきあしきはえしらで、かたはらよりはよく見ゆることあり」<sup>12)</sup>と断っている。アンダーソンはこの言葉を受けて、絵事に精通していないからこそ、自然物を描いた絵とその対象との関係に率直な判断を下しており、日本の絵画の短所を的確に捉えている<sup>13)</sup>と述べる。そこには、美術の専門家ではなかった彼自身の思いが投影されているのかもしれない。

もとより、『絵のこと』は「人の像を写すことは、つとめてその人の形に似んことを要す、面やうはさにもいはず、そのすがた衣服のさまにいたるまで、よく似たらむところすべし」<sup>14)</sup>と書き起こされて、武者絵や墨絵、そして一家を構える諸流派の、頑なに筆法や形式を踏襲する絵画への批判が続いて展開される。冒頭の一文だけを取り出すならば、後の佐竹曙山による『画法綱領』<sup>15)</sup>などの、洋風画派の画論を髣髴とさせる。しかしながら、宣長は、従来の絵画形式を全面的に否定したり、写生を実用とを性急に結びつけたりする訳ではなく、次のように述べることを忘れない。

その法にはずれてはいとあしき事おほくして、今時の心に任せてかきちらすゑどもの、及びがたき事もおほかりし。又た今の世にもろこしのふりとてまねびたるさまさまあり、その大かたは、まず何をかくにもまことの物のやうをよく見てまねびかく、これを生きうつしかいふ ... (中略) ... しかれどもまことの物と絵とはことなることもありて、まことのあるまゝにかきては、かへりて其物に似ずしてあしきこともある物なり。<sup>16)</sup>

先に示したように、アンダーソンが司馬江漢の著作の内容を説明しながら、しかもヨーロッパ流の透視図法やキアロスケーロについて理論的に紹介する洋風画派の画論ではなく、宣長のそれを重視していることは興味深い。さらに、宣長による同画論の主旨を、画家の務めは運筆の巧みさと真実に忠実であることを兼ね備えることだとした上で、その成立時に宣長が円山応挙の写生派についてはほとんど知ることがなかった<sup>17)</sup>と、わざわざ付け加えている点も注目に値する。応挙に関しては、本書の日本美術史を概観した第1編から18世紀前半の美術を論じた第9章でも、応挙が実践的な基礎に立つ写生画の創始者であると述べて、『画乗要略』を引用しながら、その事跡を詳述している。<sup>18)</sup> また、日本の絵画の特色を論じた第4編第1章では、写生画を厳しく評する『画則』を引用しながらも、現物の写生の程度は各流派によって異なるが、四条派とその他の写実主義を採用した者以外では、再現しようとした対象物の象徴的表現

を越えるものではない<sup>19)</sup>と述べて、円山四条派における写生を尊重している。

こうしてみると、アンダーソンはヨーロッパの啓蒙主義的な絵画観を物差しに、日本の美術における対象の写実的な描写の欠如を難じるばかりではなく、ヨーロッパの絵画とは異なる様式を持つ日本の絵画において、写実的描写ということがどのように考えられ、どのように絵の中に現れているか、ということに関心を抱いていたと思われる。そして、大英博物館所蔵のアンダーソン・コレクションに含まれていた、応挙筆と伝えられる27点の作品すべてが贋作だと判明したこと<sup>20)</sup>は大変皮肉だが、画史・画論についての論述内容から推察する限り、彼は円山応挙に、日本の伝統的な画法と写生が調和した一種の理想形を見ていたのではないだろうか。

夙に指摘されてきたように、自らが属する時代と文化の限界内ではあるけれども、そこには絵画様式の相違を認めながら<sup>21)</sup> 普遍的な絵画の価値基準を見いだそうとする、誠実な審美家の眼差しが感じられる。

#### 結びにかえて — 補足と展望 —

2008年9月の英国調査の報告と、それに関連してアンダーソンの主著 *The Pictorial Arts of Japan* を画史・画論の受容という観点から再読してきた。まず、補足として、アンダーソンには他に *Descriptive and Historical Catalogue of Japanese and Chinese Paintings in British Museum*<sup>22)</sup> という大著があり、そこにも本稿で示した『本朝画史』、『画乗要略』、『画巧潜覧』の他、『万宝全書』、『皇朝名画拾彙』、『浮世絵類考』、『書画集覧』等の画史・画論が挙げられていることを記しておきたい。(＊網かけはケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書」に含まれる画史・画論と重複するもの)

今後、英国における画史・画論の受容の問題に関しては、アンダーソンの二著書を比較し、さらにモリソンの *The Painter of Japan*<sup>23)</sup> を読み解く必要がある。

少なくとも形象に関しては視覚的に分析可能な作品と異なり、画史・画論の場合には言語の問題がついてまわる。本稿で採りあげた *The Pictorial Arts of Japan* では、画史・画論の引用箇所が明確に特定できる英訳がなされているが、チェンバレンだと分かっている『絵のこと』やアンダーソン自身の翻訳によるという『画乗要略』以外のそれらを、彼の周囲にいた誰が英訳しているのかということにも興味をひかれる。

また、欧米に収蔵されている日本の画史・画論については、本年9月の米国調査をはじめ、欧米における日本美術関係文献コレクションの地道な調査を重ねていきたい。

#### 註

- 1) 馬淵明子監修 『ジャポニズムの系譜』 第4回配本 ウィリアム・アンダーソン 『日本絵画芸術』 および関連文献集成 全3巻+別冊 エディション・シナプス 2007年  
 Volume 1: *The Pictorial Art of Japan*  
 Volume 2: *Descriptive and Historical Catalogue of Japanese and Chinese Paintings in British Museum*  
 Volume 3: 末松謙澄訳輔 『日本美術全書』  
 およびフリーア美術館図書館蔵 William Anderson, *The Pictorial Art of Japan: with a brief historical sketch of associated arts, and some remarks upon the pictorial art of the Chinese*

- and Koreans, S. Low, Marston, Searle and Rivington (London), 1886を参照。
- 2) 糸尾達哉「ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について」『先駆的英国人日本学者のネットワーク サトウ、アストン、チェンバレンを中心に 平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書』2007年3月
  - 3) P. コーニッキー・林望『ケンブリッジ大学図書館所蔵和漢古書総合目録』Cambridge University 八木書店 1991年
  - 4) W. Anderson, *The Pictorial Art of Japan*, pp. 241-247
  - 5) 下原美保「博物学的コレクションにおける近世やまと絵の研究 イギリス海軍軍医 W. Anderson 収集作品を中心に」『平成17年度～平成18年度科学研究補助金 基盤研究(C)(一般) 研究成果報告書』2007年3月  
    彬子女王「研究資料 標本から美術へ 十九世紀の日本美術品蒐集、特にアンダーソン・コレクションの意義について」『国華』第1360号 国華社 2009年2月
  - 6) W. Anderson, *ibid.* p. 183
  - 7) W. Anderson, *ibid.* pp. 241-243  
    坂崎担編『日本絵画論大系』名著普及会 1980年 13 15頁  
    (以下、画史・画論の原文に関しては同書を参照している)
  - 8) W. Anderson, *ibid.* pp. 241-243  
    坂崎編 前掲書 53 59頁
  - 9) W. Anderson, *ibid.* p. 201  
    坂崎編「画法彩色法」前掲書 67 68頁
  - 10) W. Anderson, *ibid.* p. 186  
    坂崎編 前掲書 86頁
  - 11) W. Anderson, *ibid.* p. xi
  - 12) 坂崎編 前掲書 190頁
  - 13) W. Anderson, *ibid.* p. 243
  - 14) W. Anderson, *ibid.* p. 244  
    坂崎編 前掲書 188頁
  - 15) 佐竹曙山『画法綱領』  
    坂崎編 前掲書 98頁  
    …画ノ用タルヤ似タルヲ貴ブ、天文地理人物花鳥遍神施妙コレ似タルヲ貴ブナリ。
  - 16) W. Anderson, *ibid.* pp. 246-7  
    坂崎編 前掲書 191頁
  - 17) W. Anderson, *ibid.* p.243  
    彬子女王によると、アンダーソン自身が画乗要略を英訳し、そのまま自著に転載しているという。  
    彬子女王 前掲論文 34頁
  - 18) W. Anderson, *ibid.* pp. 87-88
  - 19) W. Anderson, *ibid.* pp. 186-187
  - 20) 彬子女王 前掲論文 34頁  
    同論文によると、彬子女王と大英博物館アジア部日本セクション長ティモシー・クラーク氏が調査を行っている。
  - 21) W. Anderson, *ibid.* p. 186
  - 22) 馬淵明子監修 前掲書 Volume 2 参照  
    W. Anderson, *Descriptive and Historical Catalogue of Japanese and Chinese Paintings in British Museum*, 1886, p IX

23) A. Morrison, *The Painter of Japan*, Vol.1 & Vol. 2, (London), 1911

ケンブリッジ大学図書館の小山騰氏は、同書が、1950年代以前の英米において、最も普及していた日本美術史の概説書ではないかと指摘している。著者のモリソンについては小山氏による以下の論文を参照。

小山騰「アーサー・モリソンと日本」『英学史研究』第27号 1994年10月